

# 美人講師絵美先生の 拒めない夜

【ソベル版】



ルンルン

美人講師 絵美先生の  
拒めない夜

著者：ルンルン

講義が終わる五分前だった。

宅地建物取引士（宅建士）の過去問解説が一区切りつき、絵美は質疑応答の時間に入った。

手が挙がったのは、後方の席だった。

スーツの上着を椅子の背に掛けた受講者で、声は落ち着いているが、最初から少しだけ大きい。

「今の説明なんですけど、実務では違いますよね」

問いの形はしているが、確認ではなかった。

絵美は一度、問題文を指し示し、試験範囲での扱いを簡潔に説明した。

あくまで出題基準に沿った答え方だった。

すると、間髪入れずに声が重なる。

「それじゃ困るんですよ」

教室の前の方まで届く音量だった。

絵美は言葉を選び、繰り返す。

実務の話と試験対策は切り分けて考える必要があること、この講座はあくまで試験合格を目的としていること。

「でも、現場じゃそんな単純じゃないでしょう」

語尾が強くなり、視線が集まる。

隣の受講者が、資料をめくるふりをして顔を伏せた。

空気が、わずかに重くなる。

「講師として、そこをちゃんと説明する義務があるんじゃないですか」

義務、という言葉だけが、教室に残った。

絵美は一瞬、時計を見る。

残り時間を確認するためではなかった。

呼吸を整えるための間だった。

「この講座では、試験範囲外の個別事例には踏み込みません」

声の調子を変えず、規定どおりに告げる。

誰の正しさも否定しない言い方を選ぶ。

相手は引かなかったが、終業の合図がそれ以上を遮った。  
ざわついたまま席を立つ音が重なり、拍手は起きない。  
何人かが、気まずそうに視線を外す。

廊下に出たとき、胸の奥に残ったのは怒りではなかった。  
言い返せなかった悔しさでもない。  
保っていた均衡が、仕事として少しだけ削られた、その感覚だけだった。

事務所のトイレに入り、個室の鍵をかけた。  
外の音が遮断され、換気扇の低い唸りだけが残る。  
絵美は便座の蓋を下ろし、腰を下ろした。  
太腿に伝わる冷たさが、少し遅れて意識に届く。

スーツの内側が、まだ講義室の空気を含んでいる。  
呼吸が浅い。  
背中に残る視線の感触が、簡単には剥がれない。  
ここで整えれば、今日は終わる。  
そう思って目を閉じた。

けれど、身体は正直だった。  
抑え込もうとするほど、内側の熱がはっきりする。  
意識を逸らしてきた感覚が、遅れて浮かび上がり、脈に合わせて小さく波打つ。  
呼吸の数を数えようとして、失敗する。

制服の下で、わずかな動きが連なった。  
短い時間のはずなのに、感覚だけが引き延ばされる。  
いつもなら、そこで切り替えられる。  
今日は、切り替わらない。  
身体は応じているのに、心が置き去りになる。

「あっ……」

吐息が、思ったよりも大きく漏れた。

慌てて口を押さえる。

その瞬間、外の床を踏む音が一つ、近づいては遠ざかった。

ヒールでも革靴でもない、誰かが通り過ぎただけの足音。

換気扇の唸りに紛れ、音はすぐ消えた。

それでも、耳の奥に残る。

絵美は息を止め、背中を壁に預けた。

誰もいないと分かっているのに、心臓だけが遅れて強く打った。

音を消せなかったことが、妙に恥ずかしい。

もう一度、呼吸を抑えようとして

——今度は、短く掠れた息が喉の奥で弾いた。

立ち上がり、洗面台の前に立つ。

鏡の中の自分は、きちんとしている。

髪も、口元も、講師のままだ。

ただ、視線だけがわずかに近い。

自分を確かめるように、ほんの一瞬、見つめ返してしまう。

その近さが、今日はいけない。

手を洗い直し、水を切る。

終わったのか、途中でやめたのか、自分でも判別できないまま、指先の震えだけが少し遅れて残った。

胸の奥のざわめきは、消えなかった。

むしろ、理由がはっきりした。

——今日は、一人では足りない。

絵美はスマートフォンを取り出し、画面を伏せたまま、しばらく動かなかった。

指が、自然に発信ボタンの位置を覚えていることが、いちばん怖かった。

深く息を吸い、画面を起こす。

名前を探す必要はない。

指先が迷わずそこに触れる。

呼び出し音が一度、二度。

短く、均一な音。

三度目の前で、切れた。

留守番電話に切り替わる気配を感じて、絵美は慌てて画面を伏せた。

何も言えない。

言う準備も、理由も、まだない。

静寂が戻る。

換気扇の音だけが、さっきよりも大きい。

胸の奥が、少しだけ冷えた。

拒まれたわけではないと分かっている。

それでも、繋がらなかった事実が、今は重い。

もう一度かける理由はない。

けれど、画面を消す勇気も出ない。

絵美はスマートフォンを胸元に引き寄せ、しばらくそのまま立っていた。

出ない電話が、今日の限界を、静かに教えていた。

事務所を出ると、夜の空気がひやりと頬に触れた。

自動ドアが閉まる音が背後で途切れ、街の音が戻ってくる。

歩き出してから、胸元に収めたスマートフォンの重さが、いつもよりはっきりと分かった。

画面を見ないようにする。

見れば、もう一度かけてしまう。

そう分かっているから、指先はスーツの縫い目をなぞった。

---

美人講師 絵美先生の拒めない夜

著者・制作：ルンルン

発行：2026 年 2 月

---